



## 地域研究と校外実習方法論序説（2008年ノート続編） —国際学研究としての校外実習20年を振り返って

勝 俣 誠

「誰もが目に見える役には立たない—とりあえず就職につながらない—教育を受けられて、同時に誰もが衣食住に不自由しない世の中を目指すのが目標だ—」（傍点はノーマ・フィールド）

ノーマ・フィールド<sup>(1)</sup>

**要旨：**アジア・アフリカなどの「南」の地域における校外実習を行った20年を振り返り、「南北問題研究」の成果をどう学生に学ばすかを教育方法論として考察した。リベラル・アーツとしての知の獲得はいかに可能かおよび「南」なるものの属性をどう現代世界の文脈で位置づけることが可能か、の2点がその主たる考察対象となる。

### はじめに

国際学部の付属研究所（以下、付属研と略）はその規定第2条に「研究所は国際学に関する学際的な共同研究並びに個人研究を触発し、これを実施・推進することを目的とする」と在る。

本序説が国際学に関する学部同僚間の学際的研究交流の一助となればと問題提起をしてみたい。

私はこの学部に着任して、付属研の研究プロジェクトを通して、リベラル・アーツの中で、経済学はどう位置付けられるか自問してきた。現在進行中の「南北問題の学際的研究—連続経済学思想研究」もその一環である。しかし、他方では校外実習を20年近く南北問題研究の一環として実施してきて、当初から社会科学の研究者として、常につきまどってきた問いがある。

何のためにこれほどの時間を割いて、学生と共に実施する根拠とは何なのかという問いである。

実際、校外実習は訪問地の準備と学生へのそのための予備学習、実施、そして実施後の知見・考察の共有作業（報告書の作成と近年は映像作品の実現）と、週一回の演習講義を何倍も上回る時間を引率教員もゼミ生も費やしてきた。

従来、研究者はフィールド調査や地域研究の手法・あり方などは、研究課題とすることができると。しかし、2-3週間という期間限定と訪問地でのコミュニケーションが多くの場合、英語やフランス語などの通訳を介する校外実習とは、学部生を対象とする教育の一環として位置づけられる教科である。したがって、通常了解されているフィールド・ワークとは異なる教育手法の問題で、ましてや研究所の目的である国際学の研究そのものとは区別すべきと考えられてきた。

確かに、自分の専門としてきた国際経済学（青春期）と国際政治経済学（現在）がらみの演習を実施するならば、何よりも理論と実証研究を支える統計の処理・加工といった作業が重視され、現場に行く営為など必要なかったのかも知れない。

しかし、この学部に来て、経済学以外の社会科学、人文科学、自然科学の先生や同僚と共に、国際学なる学問分野の輪郭はいかなるものかを考えるようになって、自分がとすれば研究キャ

リア形成において安住しかねないディシプリン (discipline) だけに立脚しては、世界の解読作業としては極めて不充分だということに気づかせられた<sup>(2)</sup>。自分の専門を強力な思考軸 (reference point) としながら、他の専門分野と交流し、更なる自分の専門性を問いなおすという困難であるが、知的好奇心に充ち満ちた知的考察の機会を、この国際学部は与えてくれた。そして、この学部に着任してからの国際学なるものの自分の発見を学生達とどう学問的に共有すべきかが、研究者・教員の自分の関心事となった。

したがって、本稿は国際学研究としての 20 年近い校外実習を振り返り 2 つの大きな問題群を示唆することが目的となる。

一つは南北問題研究をどう実習を通して学ぶかという教育方法論に関する問いである。換言すればリベラル・アーツとしての知の獲得形態の taxonomy を豊かにする試みである。もう一つは実習という知の獲得行為を通じて見出していく南北問題研究における「南」なるものの再定義作業である。

### 1. 知の一獲得形態としての校外実習の可能性と限界

こうした問題意識に立脚し、校外実習の狙いを国際学の文脈で自分なりに明確にしようと、2008 年に、研究ノートとして、明治学院大学『国際学研究』第 33 号に「南北問題」教育方法序説—校外実習 (1991-2007) を振り返って」を掲載した<sup>(3)</sup>。

2008 年ノートでは、校外実習の企画・実施・事後報告という研究教育プロセスにおいて、より明確にすべきと思った校外実習の狙いを 3 つの設問からの考察を試みた。

- 1) 教室での講義と校外実習の教育上の狙いはどこにあるのか。
- 2) 校外実習は地域研究に対して、どう関係づけられるのか。
- 3) 高校の修学旅行やスタディーツアーとの相違はどこにあるのか。

こうした設問のもとで、2008 年ノートでは、次のような文で結びに変えた。

「筆者としては突き詰めるところ、校外実習は他の国際学部 (の提供する様々の分野の講義から成る：筆者加筆) カリキュラムと合わせて地球市民となるために、その形成に不可欠な世界を解読する力 (グローバル・リテラシー) を身につける学習活動の一つに他ならないと考える。」

2008 年ノートでは、校外実習の全プロセスを経て、国際学としてとりわけ南北問題研究としてどのような学びがあるのかを学びの内容そのものにはいって考察した。

しかし、2008 年ノートを記してから 2 回に及ぶ西アフリカ・セネガルでの校外実習の企画・実施・事後報告作業の中で、その各段階で協力者であるアフリカ側のコーディネーター及び参加ゼミ生との間でどのような問題に直面したかの記述と考察が不充分であったことが判明した。

とりわけ、過去 15 年間 7 回にわたるセネガルでの校外実習、コーディネーターを勤めてきている地域市民団体 (ENDA-GRAF、2008 年から Intermondes に名称変更)、ママデウ・ンジャイ氏とのこれからのあり方を巡っての討論<sup>(4)</sup> は、今まで必ずしも正面から考察してこなかった問

題群を発見させてくれた。すなわち、日本のような「北」の富裕国の学生・研究者が現地での短期実習を通してアフリカのような「南」の貧困国の市民団体、学生とどのような持続的關係と展望が可能なのかを幾ばくか明らかにすることが南北問題研究の課題でもあるということである。

この「北」と「南」の人々の交流を通じての關係性をどう地球市民の形成過程に向けて位置付けるのかという問いを考察する中で、2008年の研究ノートでは充分に取り組みられず、その後の考察と討論で明らかすべきと思われたこれらの点を4つの問いにまとめて提示し、それぞれに簡単な説明を加えてみたい。

- 1) 南北間の「生活水準」格差を「南」での実習により「北」の「生活水準」の再定義作業として考察する。

南北問題の核心がより公正で持続可能な關係を歴史的、地理的多様性の相互承認を通して築くこととしたら、「北」の大量の生産、消費、廃棄活動、より一般的には高度に発達したとされる生活水準そのものを問い直すことなしに、新たな關係の実現は、不可能ではないか、もし、この変革が不可欠としたら「南」での実習は、たとえ短期間であっても「北」での生活習慣を問い直す機会とならなければならないのではないか<sup>(5)</sup>。

校外実習で利用する宿泊施設は単に予算上の理由だけでなく、この教育的配慮から、なるべく現地の人々の水準に近づけるためホームステイ体験はもとより、ホテル以外の質素な施設を選んできた。また食事も土地の料理が中心となった。なかでも水道や電力のない（あっても断水や停電が多い）施設での宿泊はこの生活見直し作業に大いに貢献したと思われる。

- 2) 日本国内の「南」と国際關係の中の「南」地域と結び付けて考察する。

- 1) の「北」の生活の相対化作業に関連して、日本国内における「南」の発見・体験を実習の先立つ準備期間及び事後報告期に農村合宿や都市低所得地域の訪問などを通じて身につけることが望ましいのではないか。

農村合宿では、金銭支出をなるべく伴わないエネルギー、水、食の調達を体験したり、村落の長老や若者のヒアリング記録作成などを実施してきている。

- 3) 実習の企画・実施に関与する南北双方各人の制度的セーフティーネットの格差ないし非対称性を考察する。

「南」の人々にとって「北」を訪ねることは極めて困難である。「北」の私たち訪ねる者と「南」の訪ねられる者の間にある経済格差をどう見たらいいのだろうか。「北」の私たちは、社会保障のセーフティーネットで守られているが（海外でも手厚い旅行保険が確保されている）、「南」の市民団体のメンバーは自国によるセーフティーネットの対象にはなっていないという生存格差を考察せずして、どう南北間の人々の交流を持続可能にできるのか。

例えばセネガルでは、公的社会保障のネットで、質は問わず一応守られる人々は、公務員や外資系の企業の従業員とその家族が中心で、全人口の15%から20%にすぎないとされている。私たちのパートナーであるNGOメンバーには、病気の際の治療用に会員制の相互扶助組織に加入

しているアフリカ人がいるが、これも極めて限定的である。

#### 4) 受け入れ側の「南」の人々との共同作業による関係性の持続化

援助の論理とも、観光業者への企画と実施委託という金銭を媒介としてサービス取引の論理とも一線を画した「南北問題」研究としての現地実習はどのようにして可能か<sup>6)</sup>。

実際、文献や統計資料によってのみ、「南北問題」を考察するのは異となり、現地実習はその実施にあたり、いくつかの具体的問題に直面する。その最たる点は、「北」の富裕国の学生・教員が「南」を訪問することは「南」にとって決して中立な社会現象ではないということである。私たちの現地訪問は、対象地域、訪問先に対して否応なしに社会的・文化的インパクトを与える。観光地とされる地域では、観光客として、地元のサービス産業の「お客様」として歓迎される。外国援助が大きな役割を果たしている地域社会では、「北」からの訪問者は、援助関係者としてしばしば同定され、富裕国の「北」からの教員と学生は、地域住民の更なる援助への期待を表面化する対象となる。

確かに、これら2つの側面を私たちの校外実習のカリキュラムを通じて「北」の人間が「南」の地域の人々のサービスを利用（観光収入）し、自国政府の対外援助にも責任を有する（国民主権）以上、無関係として捨象ことは出来ない。

しかし、敢えて「南」の地域の人々との出会いと交流を通して「南北問題」という現代社会の国際的関係性の束を考察する学習ないし分析・考察行為は、観光サービスという市場論理からも、外国援助という贈与論理からも何らかの区別が必要となる。

換言すれば、市場論理からも贈与論理からも一線を画せる「南北問題」研究のための実習とはどんな実施上の特質を持つことによって、より豊かなカリキュラムとして発展できるのかという問いに答えることが今後の課題となる。

通常ツーリズムとの関係において、現状では私たちのアフリカでの校外実習の実施形態において、航空券購入は基本的に代理店に依頼する。それ以外は「南」の地域での活動の経験を積んだパートナーの NGO が私の予備調査時の協議、現場検証を通じて、国内の訪問先、移動、宿泊の設定などのサービスを準備する。そして、終了後、双方が事後評価をし、次年度の企画準備に活かせるようにしている。

ただ過去に準備期間が短いため、車両の借り上げはレンタカー会社に依頼したり、宿泊に関しては、知己の現地観光業者に手配してもらってきたこともあった。

この観点からは、私たちの実習実施形態の一部はサービスの対価として業者に対してお金を払うという商取引と基本的に異ならない。

実習で異なるのは、訪問対象と訪問対象への接近の仕方をアフリカ側のパートナーと常に協議し、新たな学びの手法を考え出す作業が組み込まれていることである。

もう一つの「南」の人々との共同作業は、実習実施後に単なる日本側参加者同士の内輪の記録でなく、「南」側の受け入れ団体も利用可能な映像資料を作ることである。「南」側の社会開発に携わる団体は、自分たちの活動や外部に伝えるための媒体を作る資金的、技術的余裕がない。また、印刷媒体（パンフレット、ブックレットなど）は、識字率が低いため一部の都市エリートに

しか伝わらない。

そこで、2008年からセネガルの現地パートナーと村民、漁民、スラム住民などの了承と協力を得て、活動ドキュメンタリーを素人ながら企画・編集することにした<sup>(7)</sup>。

この映像ドキュメンタリーのタイトルは、以下の通り。

2008年度「援助とは何かー私たちの学んだこと」06ksゼミ生

2009年度「子どもの自立とはーケニアで考えたこと」07ksゼミ生（2011年1月公開済）

2010年度「今、若者の幸せとは？ーセネガルの農村から」（仮題）08ksゼミ生（現在編集企画中）

2011年度「南と北の生活の質を考える」（仮題）09ksゼミ生（同上）

2008年度の映像は既に日本のみならずセネガル（ダカール 2008年）、エジプト（アレキサンドリアのサンゴール大学 2009年12月）でも上映され、多くのコメントや励ましをもらった。とりわけ、セネガル側のパートナーは、人々から学んだ知のお返し・共有（restitution et partage）作業として、今後も継続することを望んでくれた。

ここから、校外実習とは、「北」と「南」の人々がコラボレーションする作品の「取材活動」と言っても過言ではないであろう。実習実施後の困難だが、ずっしりとした学びのプロセスがここから始まるが、未だ試行錯誤が続く。

## 2. 南北問題研究における「南」の再評価

こうした学びの形態をめぐる問いから導き出される「南」の再評価ないし再定義とはどんなものだろうか。当面、現代史の文脈から「南」は3つの側面から特徴づけが可能と思われる。

### 1) 「南」は「北」に追いつく歴史的使命を帯びているー追いつくという強迫概念

「北」の生活水準の再検討は「南」地域は必ずしも「未完の「北」ではないという」という位置づけ作業が不可避となる。これはとりもなおさず、第2次大戦後の現代史を特徴づけてきている「開発」の概念を再考する作業と切り離すことが出来ない<sup>(8)</sup>。

冷戦下で主として米国において生まれた開発経済学は「低開発地域」をいかに「南」地域の市場化によって経済成長を実現し、「北」並みにするかという政策目標を持った応用経済学の一部門として出発した。

この「北」並みの経済を「南」において促進するための政策介入として生まれた「北」による経済援助は東西対立の中で国際関係における外交手段としての側面を持つ一方、他方では「北」が到達した開発水準こそ「南」の未来を照らすという開発過程の単線性ないし単元性に立った社会変動を正当化する結果を生んだ。

すでにマルクスは、「工業がより進んだ国は、より進んでいない国に、それ自身の未来の姿を示す」と「資本論」の前書きで記し、その発展段階説は、戦前においても日本資本主義の類型化と段階説論争を特徴づけた。

戦後は、冷戦下のエコノミスト、W・ロストローが「反共産主義」という副題で、人類史を経済

成長の諸段階として解釈しようとする単線的な経済のシナリオを提示した。

以降、「南」とは未完の「北」であり、援助はその「南」の「北」化ないし近代化と切り離せない介入行為となった<sup>(9)</sup>。

だが後発の「北」として戦後登場する日本を例にとると、この国では欧米という先進の「北」に追いつく過程で、反公害運動など負の近代化を経験するに至り、「開発」再考の動きが1970年代からさまざまな形態をとって顕在化していく<sup>(10)</sup>。

そして、80年代以降環境問題を中心に欧米に経済的に追いつくという歴史的強迫概念が日本では薄れていく一方、富裕国日本の「南」への開発援助が「日本の経験」などの文脈で活発化していく。

校外実習はこうした日本のような「北」の近代化が持つ両義性を考察する機会となる。

## 2) 「南」における人間の尊厳の剥奪状態の発見—被抑圧者としての表象

「遅れ」は低開発という近代世界史における植民地支配の産物である。「北」の社会からはしばしば見えなくなってしまう「南」社会における排除、貧困、暴力を観察することによってその状況を可能にしているこの南北関係の非対称性や、抑圧の構造的側面を考察する<sup>(11)</sup>。

そして、そこから導き出される被抑圧者の状況の回復こそ人間に対しその普遍的価値ないし尊厳を付与する営為であることを発見する。すなわち社会はその底辺ないし最弱者の接し方のなかにその人間的普遍性を獲得する。反植民地運動でのガンディーの運動や中国の孫文や毛沢東の共和国への実現は常に人間の尊厳をもっとも奪われた圧倒的大衆の参加に依拠無くして不可能であった<sup>(12)</sup>。社会とは、それを構成する人々のなかで最も排除されたり抑圧されたりしている人々とどう向き合うかによって、そのあり方が規定されるのではないかというこの「南」性は、「人類共通の低みに立つ」という哲学者花崎皋平の思想と通底するように思われる<sup>(13)</sup>。ただ今後もまだまだカタチを与える作業が必要な視点である。

## 3) 「南」の豊かさを発見する—非商品領域の残存による「豊かさ」

校外実習を終えて参加学生がしばしば感想として述べるのは「南」の「貧困」を学びに行ったのに、行ってみたら人々が生き生きとしていたのに逆に自分たちの豊かさを考えさせるきっかけになったという点である。これはだから「南」は現状維持でよいという考察を引き出すのではなく、実習の内容が約2-3週間という期間内に「南」の日常性をまずは探ることに力点が置かれている事から来る制約による要因が大きいと考えられる。

しかし、他方では従来の開発経済学の「南」地域の『開発』を正当化する「低開発性」はここでは非商品領域の未完ゆえに非経済的「豊かさ」の源泉を見出すことができる。すなわちポラニーの言う社会統合の3大原理のなかで互酬と再分配の原理がまだ濃厚に残存していて、市場原理はまだ限られた社会生活領域に限定されているからと考えることができる。

この考察はたとえば文化人類学と政治経済学との学問領域設定上の人間と社会の定義の相違に由来すると考えられる。たとえば、ヒトに関して、文化人類学は「人間についての総合的研究」(祖父江孝男)たる人類学の一部分野でヒトを多元的に識別しているが、経済学、特にポストモ

ダン期に全盛を誇った新古典派経済学では、欲望に反応する個人を想定する方法論的個人主義を採用している<sup>(14)</sup>。

この支配的時代思想に対して「南」の人々を総合的に見ようとする視点はサブジステンスの再評価につながり、広義の経済の復権を反映している。この思想的、実践的動きは近年日本の生活の質を求める社会・文化・政治運動に顕著に見いだされている<sup>(15)</sup>。

しかし、総じて日本のこの運動の中にはサブジステンスとしての「南」は歴史的には明示的に登場してこなかった。

「私たちの地球」という地球市民の立場から「北」の持続可能な社会を探る「南」の次元が不在の場合や、例えば地球温暖化対策、リサイクル運動のように「北」社会の変革にとって望ましいことは「南」にとっても望ましいという暗黙の前提があった。

また「北」の成長はそれに必要とする更なる資源を「南」から獲得する国際貿易は「南」の自然破壊を生むという南と北の不平等な関係性に注目する公正貿易運動のような動きも活発化している。そこでは「南」での生産者と「北」消費者との関係を市場ベースよりも価格形成や環境保全に重点を置き小規模ながら構築しようとしている。

しかし近年、「北」のより質の高い生活様式展望には従来遅れているとされている「南」の地域や共同体に学ぶモノやコトがあるという「豊かな南」を積極的に評価する立場が登場してきて、たとえば、ブータンやインド北部のラダックに規範を求める運動が活発化している。その例としては「懐かしき未来」運動などが上げられる。また先住民の反開発運動も生物多様性の保護要求などと共に活発化している。

### 結びにかえて一校外実習は地域研究そのものではない

以上、国際学研究としての20年の校外実習を反省を込めて考察してみたが、その学びの可能性は限りなく広がるが、他方では校外実習は地域研究そのものではないということである。予備研究の不充分さ、滞在の時間的制約、地域言語はほとんど学ばず、もっぱら英語やフランス語通訳を通して交流する接近などは地域研究の入り口を示唆する手法であっても、地域研究そのものにとって代わる知的営為ではない点はどんなに強調しても強調しきれないであろう。

従って本試論は国際学研究としての校外実習の教育方法論としての考察であることを改めて確認しておきたい。この教育方法論を支えた校外実習実施後に刊行されてきた報告書に寄稿した私のコメントないし感想は本稿末尾に「資料」として10点掲載した。

### <注>

- (1) 「小林多喜二と文学—格差社会とリベラル・アーツを考えるために」、みすず書房、No.588、第10号、2010年
- (2) 「南北問題」研究は国際学としてどのように位置付けられるかの考察は、明治学院論叢第595号にて、「国際学としての南北問題研究」—3つの新たな関係性を求めて—、国際学研究第16号、1997年を参照。
- (3) 『「南北問題」教育方法序説—校外実習（1991-2007）を振り返って—』国際学研究、第33号、2008年、pp73-87
- (4) アフリカにおける行動のための知の獲得形態の模索について、ンジャイ氏も共同執筆している“Changement politique et social - Eléments pour la pensée et l'action”, Ed. Enda Graf Sahel, Dakar, 2005年を参照。
- (5) 「南」地域から日本の空港に戻る度に感じる不思議な感覚については、勝俣誠、コラム「生きることへの限りない肯定」、岩波ブックレットNo.756、「チョコラ」、2009年を参照。

- (6) 民俗学のフィールドワークの事例でも、「南」の村落で外部からの調査者がどう位置づけられるか、悩みは尽きない。最近の論考では、樫永真佐夫、「フィールドワークにおける人間関係」、民博通信、No.130、2010年を参照。
- (7) この1回目の企画編集にあたっては、国際平和研究所の研究員桜井均氏の並々ならぬ指導なくして到底不可能であった。ここで改めて当時の学生と共に感謝したい。作品名は「援助とはどんなことか?」で、その一部紹介を [www.youtube.com/watch?v=fqxQ9SZmD\\_k](http://www.youtube.com/watch?v=fqxQ9SZmD_k) で閲覧できる。
- (8) 筆者は CNRS の Marc Humbert との共同コーディネーターとして 2010 年 7 月 10-11 日、東京日仏会館にて、国際シンポジウム「より良い共生が可能な社会を目指して」を開催した。筆者は「富裕国における豊かさ論争で貧困国はどの位置づけられる—国際政治経済学の考察」を発表。日仏レジュメは [www.mfj.gr.jp](http://www.mfj.gr.jp) で参照。本報告もその発表に多くを負っている。なお、本シンポジウムの発表を日本向けに編集した書籍が 2011 年 5 月に刊行された。(勝俣誠、マルク・アンペール、「脱成長の道—分かち合いの社会を創る」、コモンズ、2011 年)
- (9) 単線的経済史に異議を唱えた数少ない経済学者としては、アレキサンダー・ガーシュクロンがいる。絵所他訳、「後発工業国の経済史—キヤッチアップ型工業化論」、ミネルヴァ書房、2005 年
- (10) 国家の推進する急速な開発による地域社会と自然の破壊に対する危機感と抗議活動はすでに戦前にも存在していた。産業革命の黎明期の 19 世紀末に足尾銅山の有毒水銀垂れ流しに対する田中正造の精力的活動はその代表例である。彼は鉍毒事件を機械文明の病として把握した。アジアに中で先がけて開発に成功した近代日本は戦後の 1960 年代の高度成長期から「くたばれ GNP」という論調で代表される生活の質改善への動きが見出されていく。この危機の兆候は日本では日本経済が高度成長を遂げているさなかの 1960 年代に生じた水俣病の発生に代表される反公害運動と成長の負の側面をどう減じるかという公害の政治経済学の登場に見出すことができる。ここでは公害問題が顕在化する 1970 年に発表された経済学者都留重人の「国民的福祉の数量化を」と題する論文を紹介し、「開発」を再考する先駆的論調を紹介しておきたい。(朝日新聞 連載「くたばれ GNP」シリーズ 1970 年 9 月 13 日付)
- 都留は完全雇用という社会的目標の手段として GNP の増大を唱える説と GNP 増大を主目的にする GNP 信奉者を区別する。そのうえで福祉のマイナスが GNP のプラスとなってあらわれる事例として、会社の破産整理に支出される福祉と無縁の多額の法律弁護料や全般的治安悪化による、本来少なくともいかに好ましい防犯警報対策設備への支出があげられる。また市場の網にかからない友人とのゲーム、散歩や昼寝、子育て、農家の自給自足、古民家の利用などは福祉に関係するが、国民所得と直接関係がない。さらに GNP を資本主義体制概念として位置づけ、その長所として、個々の経済主体が選択の自由を持つという原則について疑念を發する。すなわち消費者は購買選択の自由で、労働者は労働と余暇についての自由である。後者の場合、理論的には労働の生産性が高まれば、労働と余暇の間の選択では余暇の選択が可能になるはずである。先進資本主義国の生産力で週 30 時間は可能で、余暇時間を充実させる可能性は事欠かない。しかし現実には生産力の上昇につれて労働の自己疎外状況は顕著になっているのに、労働時間は短縮されそうにない。
- これは労働者の選択の結果かと都留は問う。答えは「イエス」であり「ノー」である。「イエス」とは、余暇時間を主体的に充実させるような文化的環境が失われる中で、生産者主権が消費者に不満をかき立て次々と新商品購買意欲を募らせる結果、労働者自身が労働時間短縮が内包する収入停滞を選択しないからである。「ノー」とは、資本主義体制下では個々の企業は競争の中で利潤率を高めざるを得ず、率先して労働時間短縮をできず、体制からしても剰余の実現は労働時間に依存する事態を無視できず、基本的には労働者は労働時間に対する選択の余地がないからである。ここから都留は資本主義は労働時間の短縮の可能性をはらみながらもその短縮ができないために生産性の上昇につれて技術的失業の発生に脅かされ、失業者を生まないためにも GNP を増やせば、福祉と無縁でも拾い上げていかねばならないというメカニズムがあるとする。すなわち「くたばれ GNP」と「くたばれ資本主義」と同義ではないかと自問する。他方、中国の場合、この「南」の巨人の場合、アヘン戦争にはじまる帝国主義列強の侵略と半植民地化による屈辱的体験は「開発」を通して欧米目の経済力に追いつき、かつそれを追い越すという国是を指明のものとしている。この動きは国際社会では大国ナショナリズムの高揚として、またその経済規模から地球環境への影響としてするしばしば懸念材料となってきたが中国社会内部では「くたばれ GNP」は格差や地域環境問題の社会化をのぞいて公的討論の課題となっていないようである。
- (11) マイク・ディヴィス、酒井隆史 (監修)、「スラムの惑星—都市貧困のグローバル化」、明石書店、2010 年、は 1980 年代末の欧米発「構造調整」がいかに「南」の都市において排除と抑圧を生んでいるかを説明する。
- (12) 近代史において「南」として出発し、「北」の大国となった現代日本ではこの「南」性は首都東京から企画・実施されてきた政策や対策に対する国内のアイヌ民族の権利回復運動、沖縄を中心とする基地拒否運動、各地の原子力発電所建設反対運動などに見出される。沖縄問題に関しては次の拙稿を参照。勝俣誠、「沖縄問題」は「南北問題」、季刊雑誌『環』2010 年冬号、藤原書店
- (13) 花崎卓平、「生命的世界のさまざまな姿」、「南」を考える No.9、明治学院大学国際平和研究所、2007 年
- (14) ポストモダン思想と新古典派経済学および「IT 革命」との親和性を「自律」から考察した研究ノートとして、拙稿「シンボと自律についての断章ノート—A・ゴルツの作品を手がかりに」明治学院大学社会学社会福祉学研究会、第 130 号、2009 年、pp137-150 を参照
- (15) 日本では社会運動レベルでこの自分たちの社会での『豊かさ』とは何かを考える運動につながる。すでに 1970 年代には「石油ショック」を契機に加速化する原子力発電所の建設に対する環境への影響を懸念する反原発運動が本格化し、開発を支える絶えざるエネルギー消費社会を見直すエコロジー運動も生まれていく。



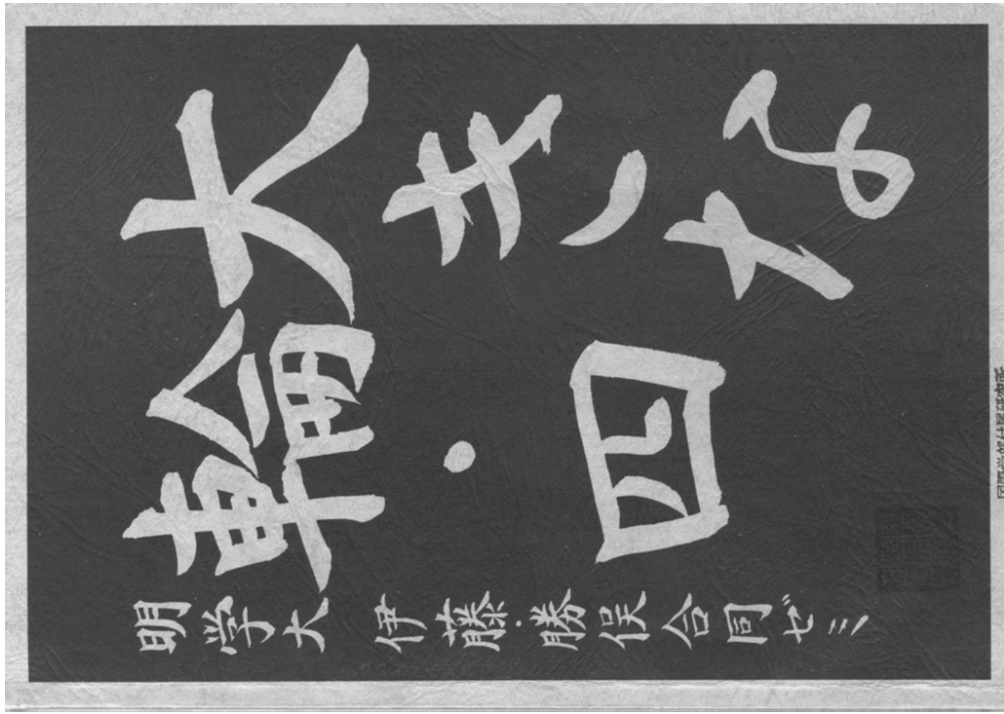
この時期から日本では地域の自然の豊かさを再評価したり、消費の量よりも質を重視する生活面からの日本社会の再考へと思考軸が移っていく。工業生産面での労働運動を中心に展開してきた社会変革の展望は労働組合組織率の恒常的低下に示されるごとく消費者ないし市民へと変革の主体も変化していく。しかし、1970年代末に顕在化する日本資本主義体制の停滞は個人の労働努力で再成長を狙うという保守政権の「社会よりも個人による解決」を下敷きにする以降、20年以上にわたる経済改革の時代が開始される。

この時期は大きく分けて富に対する2つの価値観をめぐって展開していったようである。一つは規制緩和とIT革命に支えられた金融のグローバル化で株取引などに一攫千金を射止めた人物が社会的に成功者として崇められ、富とお金であるという価値観が広まった。バブル期では特にその拝金思想が東京のような大都市で再開発の名で高層大型建築群を生む素地を作った。もうひとつは格差社会の到来で競争に疲れた人々が従来の社会的上昇志向を諦め所得より仕事の楽しさや生活の質を求める価値観が本格的に登場する。また規制緩和による非正規雇用の増大で将来に対する不安が高まり経済的成功より安定を求める保守思想も若者層を中心にみられるようになっていく。

そしてバブル期崩壊後は前者の思想が後退し、後者の必ずしもより多くの金銭所得を求めない価値観がより広がっていく。この運動はさまざまな形態をとって安易な特徴付けはできないが、当面以下の主たる傾向が指摘できる。

1. 地域をベースとして高齢化社会を反映して環境保全活動なのでシニアボランティア活動が活発化している。
2. 若者層を中心として農に対する関心が高まり、産業としての農業より、生き方としての農に関心を持ち、有機農業運動をやはり地域を中心に展開してきている。
3. 原子力発電所、軍事基地、ダム建設などの新たな開発事に対してやはり地域をベースとしてその金銭的補償より従来の生活の維持を選ぶ運動があいかわらず絶えることがない。

【資料 1】 1991 年沖繩校外実習



## こんにちは、オキナワ

知ること、見ること、語ること

勝俣 誠



今回、沖縄に船で行くことになった。東京の港から那覇の港までの二泊三日の船旅だった。飛行機に行く前に、皆の意見は船にするか、飛行機にするかで分かれた。飛行機でいくことの利点は「現地でたくさん見れる」、 「時間が節約できる」というのが主だった。

今から考えると、私達20数人をのせて沖縄に向かっていたあの船には、まだ訪れたことのない島への期待がぎゅっしりとつまっていたと思う。

と同時に、外には海しか見えず、後になってあの三日間は「何もなかった」と誰かに言わしめた本物のんびりさもあった。今、皆が忙しい

時代にあって、「何もなかった」と後になって言えることは、何とすばらしいことではないかと私は思った。それに引き換え帰りは悲しく、あつげなかつた。私達は那覇の空港からわずか数時間後に、アルミニウムのココンテナから荷物のように羽田の空港待ち合い室に投げ出された。

人は、どうやって、一つの地域を知るのだろうか。

「手際よく」知ることではできのだからうか。

「ポイントだけおさえて」知るとは可能なのだろうか。

沖縄という地域を専門としてこなかつた私にとつて、この問いは、行

く前、訪れている間、そして帰ってきた後に何回となく気になった問いであった。

実は、知ることには、色々な知り方がある、同じ言葉でも、知り方によっては、重さや、広がりがあるのではないかと思う。

たとえば、「化学肥料や殺虫剤を使わないで米をつくることはエコロジーの採理に適っている」ということをもつともと考え、「農業は有機農法がいい」とか、「食べものは地域で自給するのがいい」ということを書物や他のメディアで知ると、自分で実際に季節と植物のサイクルに合わせて、時間をかけて食べものに合せてみて知ると、知られる内容ない結論は同じでも、それを生きた人と生きなかつた人では、「食べものををつくる」という表現の重さや広がりなどは異なるのではないだろうか。

私のマイマイゼミ(1)でキャンパスの裏の水田でのお米作りが校外実習とともに必修になっているのはこうしと理由がある。すなわち、知ること、手間、ひまをかけて作ることでもあるというを学ぶことが、技術進歩による知識の高進かつ大量の集積と分類があたかもそれ自体、価値をもつたことと銘を生む時代にあつて、私はとても重要だと思っているからだ。

沖縄というシマを船で遙々訪れてみたかつたのは、私としては、こうしと「知り方」を学ばないだろうかと思つたからであつた。



「見る」とは何か

他者をひたすら見ることに、常に寡力的な何かがつ伴うと私はいつも思つてきた。

沖縄という地域を見ることが、そして、その諸相を説明すること。

よく、「南の国はやさしい」という表現を耳にする。「沖縄はやさしい」ということも聞いたことがある。しかし、もし、「やさしい」とは、表現される側が反論しないことを意味するとしたら、この「やさしい」の背後にしばしば、「やさしい」と思ふ側との間の力関係が隠されていることがある。この場合の「力」とは、お金や政治決定力などで測ることが



できるものである。

たとえば、「沖繩はやさしい」のは、その「やさしさ」を見に行く側が、「見られる」側よりも経済的・政治的に強い地域に属していることを反映してないだろうか。

「お正月にはニッポンに行こう」という旅行社のパンフレット（和服の女性と法隆寺のカラー写真があったのが印象的だった）をたまたま白保の民宿で目にする機会があったが、このニッポン人がどこまで、この「やさしさ」に寄りかかっていいのかわ、私は気になる。そして、このやさしさを便って、何でも「見てしまおう」ことには、もっと気になる。



「すべての周辺はやさしい」  
ないしは

「してやられた話し」

沖繩の現代史を改めて教えられるたびに、リフレインのように私のな

かに去来したのはこの2つの句であった。

その歴史とは、その地域の人と社会が不本意ながら生きてしまった歴史であった。そして、今、リゾート・観光という、ニッポン人による、「見る前に、見るものがすでにイメージとともに出来上ってしまったという奇妙な見方に地域社会が供されている。

こうした歴史状況のなかで、私の背負っている私のおいたちからして、私は、この社会を次々と説明（explication）してしようとすることに、やや気兼ねがする。

「説明」とは、外から（ex-）、たまたみ込む（plication）ことなのだろう、と気づいたのは、望まなかった歴史を生きてしまった人々の側とそれを生きなかつた人々との距離を考えないで、ひたすら説明しようとすることに、私は疑問を感じた時からだ。

私がアフリカの研究所にいた時、かつての植民地の「風俗・慣習」について、ヨーロッパ人の研究者が、実に刻明に説明してくれるたびに、かえって、「そういうえるあなたは、誰なのか」と複雑な気がしたのである。

彼らは、しばしば、当のアフリカ人よりもアフリカのことをよく「知って」いた。

見る側は、見ようとする対象とのかかわり合いから自由になれない。一つの地域を見に行く側と見られる側との関係において謙虚に学びたい、これが「見る」ことについて私が痛感した点である。

だからといって、この関係のみが地域に限るすべての社会・政治・経済・歴史のアプローチを律しなげればならないということこそ私が主張しているのではない。

地域のとらえ方は、ひとたび、この見ることの「畏れ」を知ったならば、すべての人々に、すべての視点で開かれていいと思う。

「地域」は誰のものか

この問を考えさせてくれたさやかな体験が最近あった。アフリカの政治や社会を紹介するラジオ番組をつくることになった私と、それを手伝いにかけてくれた関西からの

アフリカ人の友人達との間でスタジオで起きたことである。

一人の友人が、アフリカの東部と南部でよく歌われ、数か国では国歌ともなっている「ゴシヒケレリ アフリカ」という歌のカセットをアフリカの解放を象徴するものとして流せないかと持ってきた。

問題となったのは、その曲がどこで録音され、誰が版權を持っているかという点で、ディレクターも交えて、版權が確定したら、どう許可をもらうかという話にまで発展した。どこで採ったテープかがわからなかったので一体どうしたらよいかと皆が迷っている時、アフリカの友人の一人が言った。

「この歌は、アフリカの民衆の歌や。誰が歌ってもいいんだ。許可なんかいらん。」

自分が生きなかつた「地域」を語ることに私はいつももある種の陰謀めいたことを心のうちに感じてきたが、



COLUMN

单身社会像を万が一呼び起こすことになるのを危惧して、あえて別称を皆で考えたみた。

最後に一言：
るりさんをはじめ、沖繩の方々、ほとんど初めてと言っていい私の沖繩訪問について、学生とともに色々お世話していただきましたがどうございました。（1992年1月31日脱稿）

他方では、それに余りに縛られてしまふと、見えるものが見えなくなってしまうことにもなるのだろう。この場合、「地域」は語りたいすべての人に開かれていい音だ。

(注1) マイマイとは、私のゼミの参加者が太平洋上の船中で考えてくれた名称である。教員の名前をゼミにつけるのは事務上の手続き以外の何ものでもない。しかし、それによって、教員を頂点として、その熱心な取り巻き集団のみをつくるという

簡答2日目の昼過ぎ、行状終了後は公民館でさきやかな宴会が開かれた。講義、宿題提出生と共に公民館へ入っていくと、ちよとみどりく役達は仲間をお取扱いにしているところだった。役達は仲間の酒を受けささいと行われ、その方に海産物をつけて頂いた。とあります。中絶んだ後、念片さんにいはいと命じられたので僕と有行は伊勢洋へと出かけた。和は静まりかえって人の気配はしなくなった。朝早くから喧嘩で今ごろ皆んなのように眠っていることだろう。念片さんにはうまくゴクウカシた。おそろいと思えてきた。そんなこんなで無かりおそろいと思えてきた。そんなこんなで無理をいって数名の女性にきて頂いた。

このように寝つかの授取りを踏んでから参加者のうち私は尊厳だった。私はどちらからかといえん人見知りをするようになった。馬にとけこめなかつたのだ。しかし、その時分と伏せた私の目に、一つのグラスが目に入った。そこには当然のようにビールが注がれていたが、なげかみかんが浮かんでいた。そしてその玉は、と見送ると、そこには何かほっとしてしまふようなあたたかい雰囲気をもった初老の男性の姿があり、私はそこにオアシスを見た。彼の素性は、全く明らかでない。ここには仮におやさん と称することにする。彼は何かにつけて、バカクレ。お前は中1レベルだ。などと僕達をのしり、酒を周囲の人に浴びせけるようにつづかつ、実際に浴びせたりしながらも「ガハハハ」

日記
11月21日 津賀
熊合さんも自らの神威が見たいというので一緒に行った。来たところでおじいちゃん、話すとの方が夢中でやらノロノロ運動。しほいに私と熊合さんが夫婦にされたいという誤解を生じ、私はやるせない怒りとともに、沖繩の人はフレンジーで、話しやすくていいなとも思った。

と笑い飛ばしたりしている。それはもう典型的な酔っぱらいだったが、彼は僕たちを志でもあやしてくれて、とても楽しい。時が過ぎた。しかしやがてその家状もおやさんにも不幸が訪れた。僕達としゃべるのに親が来た。彼は女性を呼び出した。そしてお木恵子(飯石)が連れて来られたのだ。このとき僕は面惑的に危惧の念を抱いたが、このいやな予感の中にしてしまった。どういふ話の流れば、彼に/生慮気な女だと、言われた彼女/生慮気な女はあんなよき日と、捨てた彼女を呪って去って行ってしまったのだ。たぶん彼女も連れていたんだと思う。しかしおやさんとなつてしまふ。俺も、おやさん、すっかりしゅんとなつてしまふ。俺も出て行く。体ごと泣き、言をこぼしていた。見かねた佐藤有行が、まあまあと定めた元と元の調子を取り戻してくれたが、彼のナイーブな、面を知ることができた。

ということと、彼と会ったことで前祭についての方々の皆んな話が出来た。祭に從事する方々の考えも然なかつたのだ。しかしそれでもなお、彼は今でも僕たちが会いたいと思う一人の人だ。だが、ひとつ分でも気がなつていて、それがあつた。それは、彼が自分でもかかんを入れた。七ールを快して彼ももう五分までには大学一年くらいには見てもらえらる。その時まではおきたい。そしてまた、酒でも前祭を交わしたいものだ。あの時と同じようにみかみか言わ

(中村 克己)

その厳しい表情から、祭りの重要さを改めて僕らは知った。
祭りが終わって、いつもの慣例の顔に戻ったタケちゃんマンはとてもしほ様で、大はしゃぎして長髪に怒られていた。でも僕はそんなタケちゃんマンが大好きだ。林に気をつけて(特にお酒)いっまでも西表のみんなのアイドルでいてほしい。
きょうなら、

(門脇 立彦)

タケちゃんマンは酒をこまめに飲む。もちろん女も愛す。何でも愛する。あつたかい男だった時には酒で失敗することもあるけれど、西表の人達はみんな優しい。時には厳しくあたることもあるが、愛に満ちた彼を本気で嫌う人など誰もいない。
最初に出たのは祭りの前夜だった。あの夜、くいな草類と語に、すぐに打ちつけていっただけ僕らは、タケちゃんマンを中心に楽しん夜を過ごした。
祭り当日、昨日とは違つたタケちゃんマンがいた。

島々の近づき方—3つのお話し

勝俣誠

「DI-STANCE」について

お嬢様でここ数年、何回となくこの島々を訪ねることができた。

前回は、東京港から3泊3日の航路で那覇に行ったが、今回は、鹿児島まで汽車で、次に、島づたいに那覇港に入港した。

行く前に、島々へのたどりつき方について、前回と同様、様々な意見があったが、やはり飛行機にしないで私はよかつたと思っている。なぜか。

これは、私たちの学部がカリキュラムに組み込んでいる「校外実習」とは何かという問題と重なり合っている。

各人がある地域に行く前に、自分の関心・興味に合わせて、研究対象とされる地域についての論文や資料を読みあわせて、「地域」に行くや、自らの関心に合わせて、「地域」を切っていく、これが多々の場合「地域研究」とみなされる。

こうしたアプローチの仕方の特徴の一つは、訪れる地域にあらからじめ「問題」をみつけ、その「問題」の解明に役立つものを集めてくるといふ、まあ、やや乱暴な言い方をすれば、鬼が島にいつて、宝の山をみつけてもちかえる樫太郎のしたような方式と言えよう。

これに対して、私の考える校外実習とは、「地域」の学び方を学ぶことが中心となる。その入口の一つが「地域」と私の距離を問うことである。

今日、情報をいっぺんに、しかも早く入手する手段がきわめて高度に発達してきている。

たとえば、パソコンでデータベースをいとも簡単に利用できるよになっている。

では、こうして得られた情報を何らかの筋(ないし理論)に合わせて組み立てられれば、それがアローチの成果なのだろうか。

私はそうは思わない。

私は、すぐれた社会科学からの「地域」に関する作品とは、論理性の中に、ないしそのすさまじく訴えるものを感じさせるものがあることだと思っている。

そして、こうした作品を手がけるにあたって、何よりもまず整なければならぬ手練きは近づき方を覚悟することだ。

たとえば、琉球と関東との間の距離感を過去100年以上にわたって旅をする人々に味あわせてきたにちがいない汽車と船の旅を、「時間」をかけて実行してみることだ。

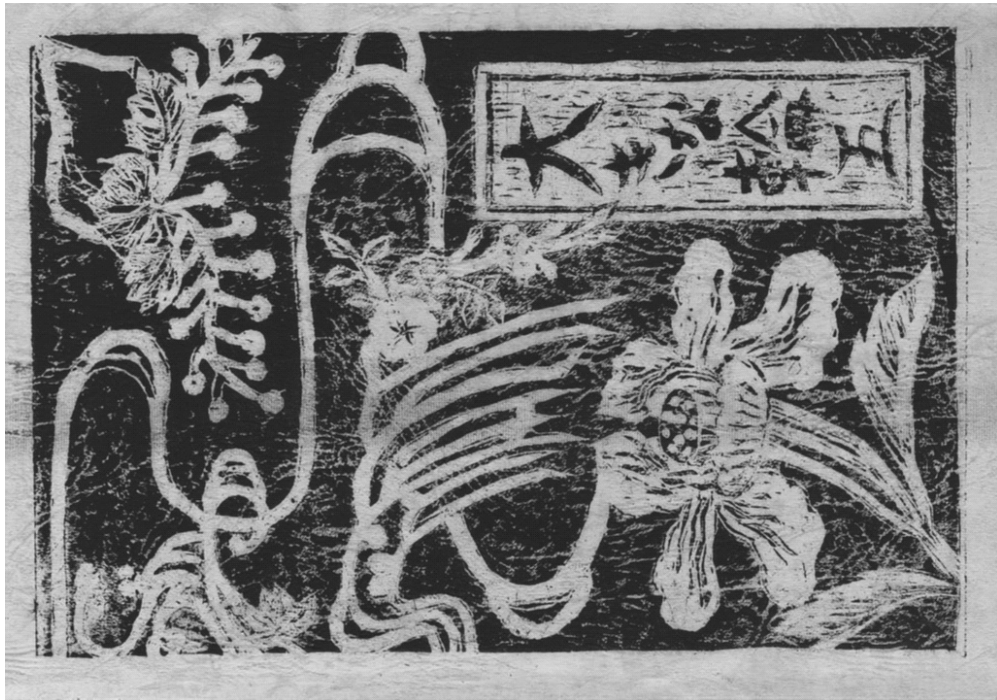
2時間弱のフライトで、研究対象としての「オキナワ」が私たちの前に飛び込んでくる安易さが、研究する私と研究される島々の間にひろがる、ある時はやせせない、ある時は豊かな空間(=時間)を味わう機会を麻痺なく消し去ってしまうことを私は懸念する。

距離、すなわち、di-stance、物事に対して、ないし向い合う姿勢を分かつことこの趣味をもう一度考えたい。

(1992年7月24日、龜徳港を出た後の船室で)

「何もできないことの解放」

西表島で、豊年祭の準備に参加した。その中で、綱引きの太いロープをワラで織る作業があった。部落の人々は、おばさんも、おじさんも、久しぶりに戻ってきた若い衆も、いとも簡単に両手の掌を台わせて、次から次へ



と手品のように指先から観を生んでいく。  
私の方は、両手か思うように重ならない。  
ウラは、思い思いの方向に回転してしまう。  
その時、私が疑問に思ったのは、どうしてこの島の人々は老いも若きもワラを燃やすことができるのだろうかという点であった。  
1つは、あるまとまりのある地域の中では、人々は、時間(三空間)を共有(share)することが多いので、生活とそれを区切るための唯一のもの(たとえばは掃帚)に必要技術は何も学校に行かなくても、いつのまにか身につけてしまうことである。成長していく子供にとって、村人全員が先生なのだ。  
2つ目は、こうした地域では、どんなに年をとっても、必ず、役割をもてるということだ。西表のお祭りでも、地域の最年長の方が、子供たちに、進行の時々のマナーについて厳しく指導されていたが、これは、この方が、地域を地域たらしめるための不可欠の存在であることを示しているのだと思っただ。

その時「あらゆる進歩は、一人一人の人間の自立の進歩である」という考えが浮んできたのを覚えている。と同時に西表の人々がお祭りを自分たちのつくりものである(たとえはお祝い用の魚は鮎真さんが自分で刺しているを取ってこられていた)と準備しているのを目にして、ある種の疑念を禁じ得なかった。

一般に、軍隊は、自国の安全を守るための一つの手段と考えられ、帝國主義とは、世界に眼をかけて、資本や権力をテコとして利益を肥大化させていく一つの仕組みで、その疑念はしばしば戦争に行きつくという理解がなされてきた。  
そして、そこでは、生産力というキーワードが重視され、何のための生産かという問は必ずしも正面から問われてこなかったと思う。

ある。  
米軍基地が守ろうとしているものをとどけていくと、1キロ 400円のビフテキにしか行き着かないのはつまらないことであるが、このつまらなさを支えているのは、アメリカ人だけではないなと思った。

「1キロ400円のビフテキのために」  
嘉手納米軍基地の事前の勉強のために、NHKのつくつくつくたテレビ番組をみた。日本側の思いやり予算でつくった基地内の立派な施設などが次から次へと映し出された。その中で私にとつてとりわけ興味を感じたのは、基地内のスーパーマーケットでは、米国内土から空輸される牛肉が、1キロ 400円位で売られていて、基地内にいるかぎり、米国人は、沖縄でも全く本土並み(アメリカ合衆国並み)に生活できるということだった。

沖縄の実習に同行した同僚はこの話を耳にし、私たちのゼミ生の一人が基地内訪問が可能になりそうだと知った時、アイスポックスをもって引摩教員として学生と一緒に基地内にはいりたいと主張した位である(もつとも、直前になって、残念ながら訪問は中止になった)。

確かに、牛肉が安く買えることは、うらやましいことに違いないが、私がかつと気づいたのは、米軍が、世界に軍事基地を置いてまわっているのは、実は、1キロ 400円のビフテキで稼働される膨大なエネルギーのかたまりに立った消費生活ではないであろうかということであった。

それに引き換え、私の住んでいる東京はどうだろうか。この間、我が家の愛犬が行方不明になって、屋敷から近道を歩きまわった機会があったのだが、屋敷の道は、はき溜められた神田町の道のごとく、人気が少なく、高齢者がほとんど目につかない。かつて、アフリカからはじめて日本に来た友人が、東京では「老人と子供はどこに隠れているのか」と聞かれたことがあったが、こうした指輪は、東京という地域が、働き盛りの層を中心に作られ、それ以外の層(子供と老人)は、ともに隔離されてしまう事象の一面をついていないだろうか。ちなみに、西表の方に聞いた

私たち、先進工業国の人々は、今、簡便という言葉喪失してしまっている。資本主義は欲望の解放を裏に巧みに生み出してきて、自由競争原理という万人が万人に対立しながら、生産のマシーンを際限なき欲望のプロセスで機能させていく。<sup>45)</sup>  
昨日より今日、何かを減らすことができなくなっている。それは、欲求不満につながり、失業につながる。  
唯一、減らすのに成功しているのは、食べ物や飲み物の塩分と糖分位である。これは、権力や知識と異なり、一つの身体は、外部からの拒絶量において物理的限界があるからで



(注1) 石垣島で「限外に権威」および「出すべき注意」という示唆に富んだコピーを筆者に教えてくれた同僚竹武氏にこの場を借りて感謝したい。



## 【資料3】1993年タンザニア校外実習

## Ahsante Sana



明治学院大学91年度勝俣ゼミ校外実習報告

## 「アフリカ、フィリピン、そして日本」

—マトムさんの写真を見て考えたこと—  
 「日本と南アの今後の関係を考える市民の集い」( ' 93 . 9 . 25 ) での挨拶より  
 勝俣 誠

写真をご覧になった方々、皆様さんにごうらうらうに思われたいと思いが、私が感じたことを二つお話ししたいと思います。

マトムさんの写真は、この展覧会を開く前から知っていて、彼が日本に来たときに本格的に見せていただいたのですが、これは私には撮れない写真であると思わず感じました。彼の写真に写されている人々との自然な関係は、私には絶対に持てないと思えます。私自身ときどきアフリカに行きますが、あるときからカメラを持って行くことにしました。始めはカメラがない方が人間関係として自然だと思ったのですが、考えてみれば授業やいろいろな人に話をするときには、スライドにするなどして役に立ちます。写真を日本に持ち帰れば、私自身が見たものを共有できると考えました。ただ、その時に問題が起きたのです。アフリカの人々を写すとき、写される側の自分との関係をどのようにもつたらいいかという問題です。それはものすごく難しいのです。カメラを持っていくだけで、異なる関係になるのです。マトムさんの写真を見て、彼だからできる、僕にはできないと思つたのは、撮写体は写す人間を作る、写される人間は写す人間を育てているかもしれない、ということです。

二つ目は、なぜ僕にはできないかか考えました。これは皆さんもアフリカに行かれて感じることもかもしれません。アパルトヘイトに加担してきた人間として位置付けられる以外には私たちは、なんだかんだと言つても上と下との関係を作ってきたのではな

いかと感ずまして、こういう写真はマトムさんだから撮れたのではないかと思いましたが、また、マトムさんの写した写真、マトムさんと撮写体との関係のようなものを自然に作れるかというのが私の課題でもあります。

私は今、明治学院大学にいます。7、8年前に働き始めたときに南北問題をやってくれと言われました。南北問題はいろいろな見方があるのですが、私は今の南アで起きたこと、起きていることは基本的に南北問題で位置付けられると考えています。

一般の社会科学教科書にあるように、豊かになった北は南を助けなければいけないという話になるのです。そうなると、いつの間にか南の人間は援助の対象ということになってしまいます。東南アジアに行っても、彼らの貧しさを助けなければいけない。相手の人間は援助の対象になつてしまうこともあれば、開発の対象にもなつてしまう。これはおかしいと思います。南と北との関係はそんなに単純ではなくて、実は南を作っているのは北なのです。グローバルゼイションとか国際化とか言ってますが、それは南の国に北の経済的影響を及ぼしていく過程なのです。

南北問題は決して援助の問題ではなく、開発の問題でもなく、南が北に、北が南にどういにかかわり方をしたか、それが一番大切な問題だと思えます。それは南アとも似ています。例えばアパルトヘイトの問題も反アパルトヘイト運動はやはり北の責任で日本の責任も大きかったと思えます。

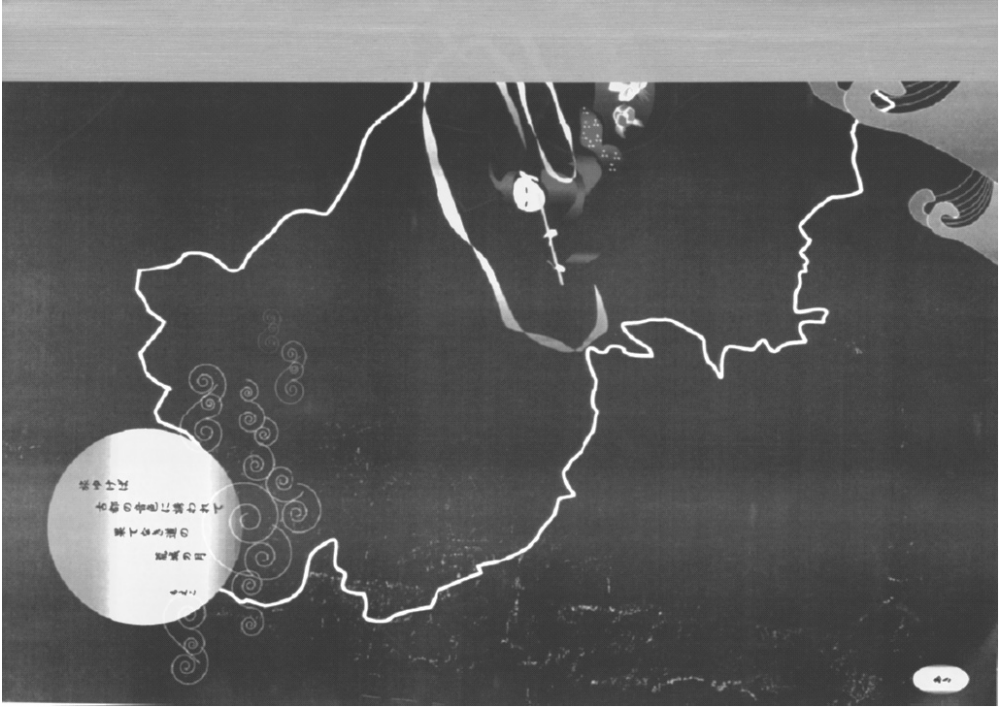




【資料4】1996年キューバ校外実習







【資料5】1998年中・日・韓校外実習

私はある時から、おそろくさまざまな地域と鮮やかなやり方で旅行できたせいかもしれません。世の中を治める側と治められる側の二分法でみることに抵抗を感じるようになってきました。世界中のさまざまな地域のさまざまな人々の生きる風景をただ眺めてみたい。

身近な例を引いておきます。私はしばしば都内の自宅から大手町方面行きの地下鉄丸の内線に乗りますが、時間帯によってさまざまな人々が乗り合わせています。朝のラッシュアワーだと運動する人々が中心で日経新聞やパソコンのマニユアルなど読んでいる人が結構います。しかし昼頃のがらんとした車内だと子連れの主婦や年長者などが目立ちます。

またスポーツ新聞やコミックを読んでいる若者や中年の人々も目につきます。明らかにこの2つの時間帯に乗っている人々は異なっています。「くに」の今の経済や政治を動かす人々が多く乗るのが朝の電車とするならば、屋下がりの電車は多くの場合そういう人々の決定によって動かされる人々が多く乗っている電車ということになります。そこで、どっちの電車により多くの人々を動かす人々が乗っているかか考えるのが権力関係や物事や人々を判断する見方に対して、どっちも要するに今を生きる人々だと自分に言い聞かせるのが今の私の立場です。

東アジアへの旅でも、この人々のあるようにある風景を学生と見てみたい。それが私の旅へのアプローチの大切な側面の一つでした。下関の港ターミナルの待ち合わせ室で一輛に行列を作ったかつぎ屋のおばさん達、釜山の港市場で今川焼きのようなものを売っていたお兄さん、自分の身の丈の倍の大きさの荷物を自転車用の荷台に乗せ人混みの中をすり抜けていったおじさん、上海行き列車の中で外国に行きたいと言っていた中国の若者達、上海からの神戸行き食堂であった日本人の青年、皆それぞれ生きています。だれでも生きることに道徳は入らないのです。

東アジアの人々と「くに」を、永田町とホワイトハウスと中南海の立場からみろの

ではありません。まず、とにかくあるがままにみたい。それが今回のわたしの実習のコンセプトの一つでした。東京駅から東京駅まで4つの港を使ってあえて旅をしてみたのはそのためでした。

だからといってこれらの地域の歴史を考えなかつた旅ではありませんでした。人々は時々の権力によって、ある時は監視され、またある時は主人公としてもあそばされてきました。彼らにはどんな過去の記憶があるのだろうか。権力の欺える過去、豪族や地域の人々が生きた過去、外部の私達はそれらをどう知って、どう考えたいのだろうか。

そこでも私はとにかくは人々の生きざまから考えてみたいと思います。人々を文明というとしてつともなく大きな概念でくくってしまうのではなく、日々人々が生きる、限りなくなく多様な文化の垣かみしてみたい。毎日、何を食べているのだろうか、何が日常生活の中で一番心配なのだろうか。

この文明よりは文化の観点で世界をみたいと思うようになった最大の理由は、いろいろな地域をみてきて、それぞれの地域の人々の生きざまに対し、大きな、あるいは大ざっぱな文明論で優勢をつけたくないと思っただけです。

一口に東アジアといっても人々は無数の文化を生きてきた。それらが互いに尊重できる社会のあり方はどんなものなのか、この間に少しでも切り口が見えてきたら、この実習の目的の大半は果たせたと思っています。

附録：今回の実習で本当にお世話になった秋月先生および橋先生、ありがとうございました。先生のお力があったので楽しいものになりました。また、出発前に船橋湖ダムで競争中の朗読人・中国人朗読演行の記憶をたどるために私達を案内してくれた「ダムの歴史と記憶の会」の橋本・中島夫妻に感謝します。そして我輩は私の黒靴を持ってくれたゼミの皆さんにもありがとう。

1999年1月30日 快晴 静保 誠



【資料6】1999年ガーナ校外実習

保存版

ガーナを先取り！ガーナ完全情報！ 2 | 13~3 | 2号

# GHANA Walker

勝歴七三九年度  
校外実習 IN GHANA

- ★フーバーの美味しいお店
- ★勝医ゼミ生が行く！
- ★この街大好き！
- ★アジヤンテン遊あれこれ
- ★旅行ヘアスタイルを探
- ★みんな大好き！
- ★ヨゴの秘密
- ★洋特派員、裏化粧の真相？
- ★今すぐゲット！カカオ豆

飛への道のり、99

# GHANA Walker

## Comment

# 「身は軽く、しかし命は万人に重く」

磯俣 誠

私達はなぜこんなに重いのか。

私達のゼミは、南北問題を日本という「北」の側から考え、学ぶことだった。そして、校外実習はガーナという「南」の国を選んだ。

南北問題は何を考える学問分野なのか、そしてそもそも何が問題なのか、孝行の教科書でもあろうから、多くの人々は豊かな国々と貧しい国々との間の格差が問題で、その格差を援助や貿易によってなくしていくことが解決策と答えるだろう。

しかし、私達のゼミでは一歩踏み込んで、「南」を単に日本が援助とか投資とかの対象としてみるのではなく、「南」の人々の生活に少しでも接することによって、この格差を具体的に考えてみる場として位置づけることに大きな狙いがあった。

1999年2月、日本の真冬に西アフリカの真夏のガーナを私達は訪問した。

私達は何を学んだのだろうか。各人各々の関心から、様々なコトやモノを学んだらう。この報告書がそれを物語っている。

よく「南」の地域に行く機会のある私も今回多くのことを学んだ。

まず、ガーナへの移動は出発前から始まった。

あれもこれもとバックに詰めていくうちにどんどんバックは重くなる。各種健康関連製品、参考書から、パソコンまで、ある旅行ガイドに「あって便利と思うモノは、なくて済ませるモノ」と書いてあったのを思いだし、なるほど、私達の生活はすごい便利さの上にのっかっているのだと考えさせられた。「いつでもどこでも好きなだけ」、これはある大手スーパーの創始者が第2次大戦後のモノ不足＝貧乏を2度と再現させないために誓ったモットーだそうだった。そしていま、それは私達の日本でも実現している。全国にめぐらされた3万軒のコンビニ。そして常時ヒット商品を出しつつ、3、000点の中から自分の好きなものを選んで消費するという自己決定と自己充足。

ベキ・ブレンゴの村にもいつかコンビニができ、人々はやはり3、000点の商品から自分の好きなものを選ぶ時代がくるのだろうか。

しかしそれを予想する前に、私達の見た現実が、私達の重い荷物に比して、かくも少ないモノとおカネで立派に生きていた人々だった。

私達の文明は、便利さを失うことを恐れて、いったいどれだけ稼いで、使って、捨てたら気が済むのだろうかと改めて考えて考えた旅でもあった。質素でしかし万人がそれなりに暮らせる文明はいつこの地球に実現するのだろうか。

## Comment

命のお値段。

若葉局、今ドラッグストア。駅ビルでも食べ物や物を売るコーナーともほぼ隣りに私達の身体の健康を保つための商品や店がある。これを書く前にも、ドラッグストアに買い物にいった。これ程まで多くの種類の補ブラシが選べる時代は人類史になかったのではと、思いながら、レジに行列を作る。私の前のおじいさんが買ったモノは養命酒だった。隣のレジの年をとった女性の買い物は漢方の健康食品のエキスのようだった。そして私は？ヒミツです。

その時考えたことは、私を含めて皆生きただんたということだった。そうだが老いも若きも、「北」の私達も、ベキ・ブレンゴで会った人々も、皆、健康により長く生きたいのだ。

数々の予防注射、ありとあらゆる病氣やケガに対する薬、旅行保険、蚊にさされないようにと蚊とり線香とシチュッシュ。絶えず持ち歩いていていたミネラルウォーターと殺菌ティッシュ。敬学したらきりが無い。自分、自分だけではせめて健康でいたい。私達の生きる今日の世界において、こんな自明のことがなぜやばり万人に守られないのか。私達のゼミで教材としても使った毎年出される人間開発報告を見るだけでも、この命のお値段の格差は気の遠くなるようなものだ。平均寿命は日本では80歳で、ガーナは60歳。5歳未満の乳幼児死亡率（出生1000人中）は、日本4人に比して、ガーナは25倍余りの105人（1998年世界子供白書2000年版）。

無事帰ってよかった。誰もが成田についてそう思ったに違いない。しかし、同時に私達が後にしたガーナのベキの、アジャンティの、ケープコーストの、アクラの、アフリカの人々は？

世界の原料は日本のためにあるというエゴロジエを21世紀に向けてどう克服したらいいのだろうか。

私も君達も重い課題をしょっている。

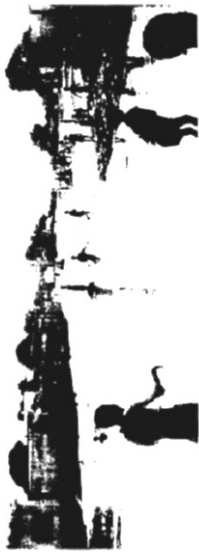


## 【資料 7】 2000 年セネガル校外実習

98k 勝保ゼミ  
セネガル校外実習報告書

# TERANGA

テランガ～運帯～



Oct.19, 2000- Nov.5, 2000

Senegal

98k Katsumata Zemi

## 校外実習とは何か

国際学部には「校外実習」という科目がある。とりわけ明確な定義があるわけではなく、各教員の位置づけは様々である。期間はすべて2-3週間であっても、各教員の考え方を反映し、実施方法は実に多様だ。例えば、宿泊施設一つとつても、施行代理店が一括して予約したホテルに泊まり、大きなスーツケースで移動する実習もあれば、私たちのゼミのようにバック・パッカー・スタイルで、非営利団体の簡素な施設を利用してながら実施するものもある。

以下、なぜ私のゼミでは、こうした実施方法を選び、そこで君たちが何に気付いて欲しかったかをセネガルでの実習を事例として簡単にまとめておこう。

先ず、私のゼミの柱である南北問題からの位置づけだ。

日本という豊かで、過剰開発国とさえ言える「北」の学生が、過少開発国ないし発展途上国である「南」へ行くことなどなことが起こるかを考え、体験することである。教科書風にいえば、今の世の中には豊かな北と貧しい南の国々があるって、その間の格差をなくしていくことが南北問題の解決策であると一般に理解されている。そこで、「北」が「南」を助ける「開発援助」や「国際協力」といった用語が登揚される。しかし、それは格差はよくないと記憶するだけでの、何やジョーズに記載されている「地球環境を守ろう」という誰でもが反対しないロゴジュのようなものにとどまり、体験するのとは異なる。

体験するとは身をもつて感じ、気づくことだ。マリアの薬から、ミネラルウォーターの確保を経て、得体の知れない病原菌の不安まで、アフリカでの自分の体の健康は最大の関心事である。誰もが自分だけは健康でいたいというこの当然の月並みの願望が、私たちには確保されていて、彼らアフリカ人の圧倒的な部分にはそれが確保されていないことに気づく。私たちは安全確保の手段を持っていて、彼らは持っていない。日本人の平均寿命が80歳前後に対して、セネガル人のそれが50歳強という格差が如実に語っている。

第2は、実習のやり方に、南北問題を考える上で、私が極めて重要と思われ側面が含まれていることだ。私は「圧倒的アフリカ人」という表現を使ったが、これらの人々の生活をバスやホテルの窓から見ることはあっても、それに触れることは「北」からの私たちにとって容易ではない。ましてや数週間ではますます難しくなる。

こうした制約にも関わらず、少しでも接してみようとするには、なるべく質素な宿泊施設や食堂を利用してみることである。やや平たい言葉を使えば、圧倒的アフリカ人の目線に少しでも近づくことである。地元料理の作り方から、庶民の夢や願望までいろいろの見えるのが見えてくる。格差を援助によってなくそうというのは簡単だが、その対象となる圧倒的アフリカ人の生活や彼らの願望



を知らなくて、どこまで彼らの利害を代弁できるだろうか。  
そしてそもそも「北」の私たちの生活スタイルに見いだされる数々の過剰に気  
つき、それをよき質素な、よりバランスのとれたものに変えることになり、南  
北格差をなくせると考えることは非現実的で、「南」に対して説得力を持つとは  
思われない。「南」ないしアフリカに学ぶという意味にはこうした側面もあるの  
だ。私自身、アフリカに限らず、「南」の国々に行つて、逆にある種の豊かさを  
感じるのだから私たちの過剰社会には見えなくなくっている、生きるといふ実感が  
体験できるとも思っている。断水や停電が回復したとき感じる安堵感は、  
水や電気の大切さを改めてわからせてくれる。

第3は、もつとも基本的なことだが、電話やメールでことを済ますことが出  
来ないアフリカでは、他者の顔を否定なしにつきあわせられることになり、口  
頭ないし肉声によるあいさつが頻繁に行われることである。日本のような北の  
社会は金銭関係でサービスが基本的に供給され、基本的には生身の人間関係を  
排除した無縁の社会、ないし効率優先の社会だが、市場の原理が広範に発達し  
ていないアフリカのような社会では、生身の人間関係の裏に多くの物事を左右  
し、あいさつは出会い、つき合い、すれ違いの原則である。実際、セネガ  
ルでは単なるお金の契約関係ではない、NGOやそれを手伝うごく普通の人や  
学生と否応なしにヒトとヒトの関係としてつき合わされてることとなった。私  
達「北」の国からの皮相なアフリカ観から相手側の人々と傷つけてしまったこ  
ともあった。これも二度とくり返してはならない校外実習の教訓だろう。

最後にくり返しておこう。「私達はアフリカの人々に会いに行つた。単にア  
フリカを見に行つたのではない」

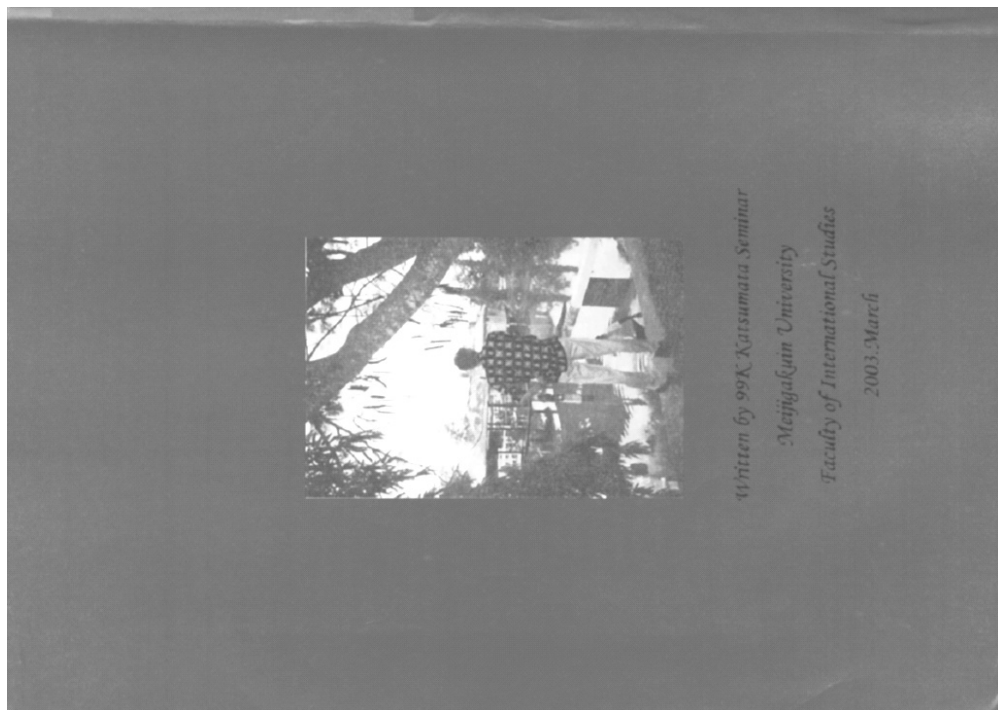
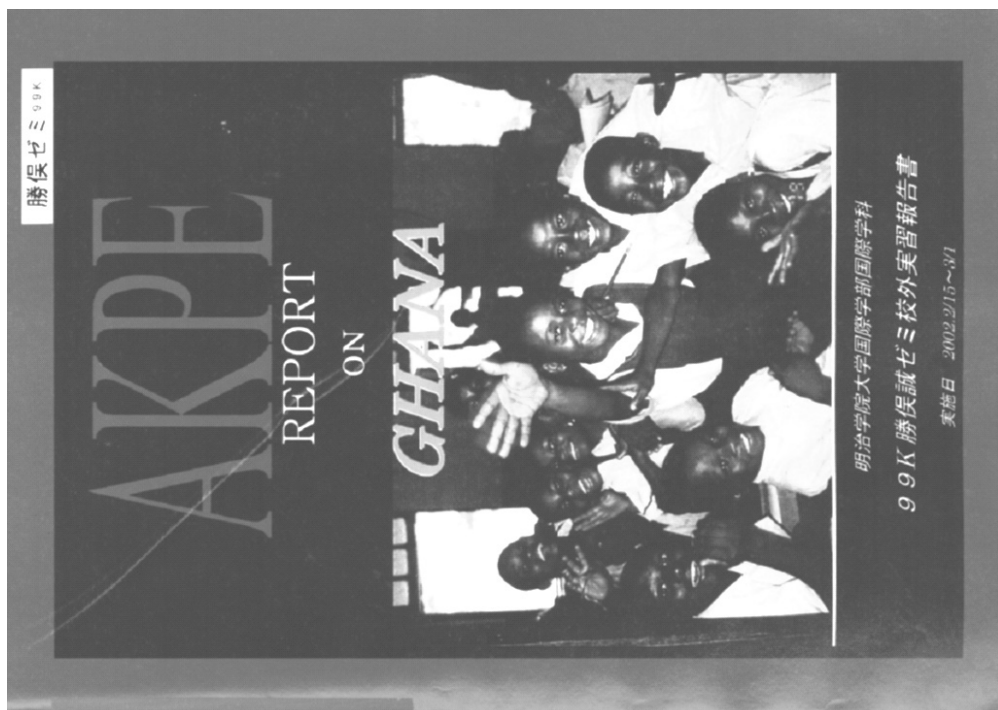
君達はこれからも様々な形で「南」に行つたり、南と関係することがあるか  
もしれない。その時、私達の学んだ実習の準備や後始末を思い出し、一体、私  
達はどんな21世紀をつくっていくのかを考えることを忘れないでほしい。

2002年2月末、  
カーナからもどるシベリア上空の機中で

勝兵 誠



【資料8】2001年方一十校外実習





年後、空襲を免れた新宿駅から3キロくらいの一角にある病院で生まれました。小さい頃のかくれんぼは焼け跡でした。新宿駅の近くの保健所に予防接種に親に連れられていったとき、駅前には戦争から帰ってきた負傷兵（傷痍軍人）が目に入りました。また、中央線の高架の壁に沿って無数のバラック（即席住宅）が連られ、焼け出された人や帰ってきても戻るところのない人々が住んでいたのを見ています。第三世界のストラムと重なり合う景色です。

こんな戦争をなせしめたのだろうか。避けることが出来なかったのか、始めた戦争をズルズルと続け、日本人自身の手で止めることさえ出来なかったこの戦争。そして、戦後50年以上もこの後始末が出来ない日本とい国とはどんな国なのだろう。従軍慰安婦問題を論じる市民団体が、嫌がらせによって集まりさえまともにも出来ない国とはどんな国なのだろうか（注）。

**欲望の開放は進歩か**

この戦争の反省が書いてある小説「ヒルマの翌朝」の次の一節です。「我が国は戦争をして、竹山道達さんという人物に小説『ヒルマの翌朝』の次の一節です。「我が国は戦争をして、くるんしています。それはむだな欲をだしたからです。思いあがったあまり、人間としてのもっとも大切なものを忘れたからです。われらが奉じた文明というものが、一面にはなはだ淡薄なものだったからです。この国の人々のように無気力でともすると酔生夢死するということになっては、それだけではよくないことは明らかです。しかしわれわれも氣力がありながら、もっと欲がすくなくなくなるようにつとめなくてはならないではないでしょうか。それなくては、ただ日本人ばかりでなく、人間全体が、この先もどうい救われたいのではないのでしょうか？」（新潮文庫、1984、183ページ）。

ヒルマの人々が「無気力」であるというのは偏見ですが、戦争という組織暴力についての今から半世紀前の一つの画題が窺い出ていると思います。

欲望の戦争と復興が人類の生活に便利さを与えてくれる石油の発掘と運び出しの可能性と同時に語られています。ヒトはどれだけの便利さがあたら満足するのでしょうか。

私達が滞在した西アフリカのカベキ村の人々に私達は学べるものはないのでしょうか。委縮した夢を回復させよう

21世紀は欲望を解放する代わりに、質素だが、楽しい文明を発明することは出来ないのでしょうか。皆さんの生きるこの世紀をよりヒト殺しの少ない世界に、よりまともな世界にするにはどうしたいのでしょうか。商品情報と思考のディテールに野もれた日常性をどう突き放し委縮した夢を回復させたい。

大学は、その切り口を見つめる道具を教える場です。残りのキャンパスでの勉強を充実させて下さい。

ヒグラシのオーケストラが始まる門の夕方から。 藤原 誠

(注) 2002年5月12日、パワネット・ジャパン主催、明治学院大学平和研究所後援で、「『女性国際犯罪法廷』の判決を実現させよう! 2002年国際シンポジウム」が日金キャンパスで開催されました。いくつかの外部からの嫌がらせがありましたが、180人の教室に約300人の参加がありました。国際学部卒の卒業生の方々もかけつけてくれました。私は、日本国憲法第21条（集会・結社・言論の自由）と第23条（学問の自由）からして、明学の平和研究シンポジウムに協力したことは正しかったと思うと同時に、こうしたイミを理解し、実行に移すことの出来る教職員や卒業生がいる大学で働けることに誇りを感じました。

アメリカ、アフリカそしてナガサキ 一あれから一年後の世界ー

2001年9月13日水曜日、晴れ。

私はこの日この村に畑仕事できています。午後、学長から突然ここに電話があり、11日の米国での事件でこれから向かってくるから向かないから、ガーナへの校外実習を考慮して欲しいという旨が伝えられました。私は庭の前の椅子に腰掛け、青空の下にくっきりと縁線を浮かび上がらせている山を眺めながら学長の声を聞いていました。そして、この山の先の太平洋の向こう側の北アメリカという大陸のさらに東の海岸で起きたこと、そしてこれから起きることのイミがすぐに掴めませんでした。電話ではとにかく明日の昼まで返事を待って欲しいと伝えました。ただ確かなことは海の向こうでとんでもないことが起きたということでした。そして次に考えたことは、時々鳥のさえずりさえ聞こえ、真夏の緑をまどうさそうと残している山に囲まれたこの村は、この村だけは平和なんだという奇妙な実感でした。

2002年3月13日、快晴。

私は長崎空港から朝一番の飛行機で羽田に向かっています。前日、長崎に向かう機中で日本列島は広く高気圧におおわれ、地上がよく見えますといった放送があった。いつも通商間に遊る私はわざわざ窓際で移動してみました。突然、雪で覆われた富士山頂やまはらに雲を抱いた八ヶ岳の山脈が眼下をゆっくりと通り過ぎていくのが見えしました。そのこともあって降りる便では、この日本列島を見るため初めから窓際に座ってみました。飛行機は朝日できらきら光る長崎半島をぐるりと旋回し、霧のような有明海を横断し別府灣へと抜けます。小さな島思い思いに散らばる瀬戸内海を抜け、中部地方の山脈の上を通過していきます。地図を見るように眼下に広がる黒々としたシワシワの山並みを眺めながら、9月11日事件で知ることになったアフガニスタンのことを考えたりしました。

私はこの国を訪れたことはありませんが、9月11日事件以来のことであることこの山の多い国の地図をメディアで見受けられるようになりました。向のために世界は、そして日本は地図でさえもすぐに見分けつかないこの小国に注目するようになったのでしょうか。それは世界最速の車輪が空機をしたためです。本州の山並みを見ながら、私はアフガニスタンのことにながさきには前日お会いした杉島の方々の言葉にいきつきましました。

そもそも私が長崎を突然訪問したのは、私が勤める国際平和研究所の研究会やシンポジウムでお世話になった藤田定夫さんがこの2月26日亡くなられた連発の方にお花をお届けするのだった。藤田さんはメロン・ナガサキの悲劇は七バクシャの立場からのもっともよく理解されることを確信し、長崎から核戦争をなくするための訴えを世界に発信するた私たちを迎えてくれ、生前の先生の思い出から、いつの間にかこれらどう平和を語り継いでいくかに話題が移っていました。過去の記憶をどう今起きていることに結びつけるか。この問いこそ半世紀以上の前の平和運動を風化させないための平和運動の使命ではなかり、こうしたお話をなかでなかでも印象的だったのは、ナガサキが最後の被爆地であって欲しいですと云った言葉でした。

今、本当にナガサキは最後の七バクシャ地となる確信はあるのでしょうか。

2002年7月28日、曇り。  
毎年、この季節になると、あの戦争の思い出がメディアに登場します。私は戦艦から一

## 【資料 9】2003 年タイ校外実習

## 校外実習報告書

29.Oct.03~9.Nov.03 Thailand

明治学院大学国際学部国際学科

01 年度生 勝俣ゼミ

「僕たちの目の前にただただ明るいだけの真夜中のコンピニが待っていた」

## こうして終わった校外実習

2004年11月8日 深夜のバンコック空港。  
私達は思い思いの荷物で、長い暇いそいで店員のやたらに多い空港のショッピングモールを抜けて、格重が二つに向かった。やがて機内には案内される。成田行き機はほぼ予定通り、この真夜中の便は無事に照明が広がるバンコック空港を後にし、グライと私達の国二ボーンに向けて北上していく。周りの人を見る。目の前の座席の背に置かれたショッピングカートを人、配られたイヤホンをつけて、備え付けのゲームに興ずる人。目をふぶって寝る人。

こうして旅は終わる。数時間後に私達はあのニッポン国に戻る。シャッター一枚で日差しを避けながら通過した汗ばんだヒップがほとんどどろんどろん乾かし、寒やかに冷える者っていくのを感じず。

機内アナウンスで催されたり起こされ、いつの間にか窓の外に副方の成田周辺の畑やゴルフ場が見え出す。携帯電話を出したりじつたりしている人々が目につく。

一時間くらい後、私達はジェラルミンの筒から目覚めるように押し出され、やはりやたらに長い空港ビルの白っぽい通路を通して、空港の税関へと向かった。皆早く家へ戻りたい、各人のエビはケータイで忙しく終わった。

## タイの校外実習はこうして終わった。

## リサイクル少年とエプロンおじさん

タイ行きは迷走した上での選択であった。キューバもいいし、西オーストラリアもいいし、一時は南半球の東チモールも考えた。でもタイから戻ってきた今、タイに行ってみようかと思ふ。何しよ、いろいろいる人々に会えたからだ。一人一人が肩書きや地位に関係なく、私達の目の前にいろいろなきつきかけで登場したとえば、わずかな数時間の乗機鉄道でカンチャナプリに居る車内街ビールの少年、通しそうに私達の街ビールの空き缶を1個数円で売れるとかとストローでつなぎ合わせ、車輛から車輪を売り歩いていた。私は彼を「リサイクル少年」と名づけた。やがて、今度はベンチケーキを売りに旅費をかけた初老のおじさんが獲しように私達の車輛に入ってきた。私は彼を「エプロンおじさん」と呼びたくなつた。

## 静かな海での静かなりわい(1)

数日後、タイランド湾(シヤム湾)に面するバンコックから西オーストラリアにあるサムツム・ソングラム島某のクロンコロン村の海に私達は小舟で出た。ビルマ国境に接する山脈に添って流れるメーエタクロン川の河口に位置する。海水とこの川の水が混じり合う汽水地域で、マングループの森が水平線を築取る。4、50代くらいだろうか、森のある岬を深めにかぶった日に焼けた女と男が鏡のような静かな水面から上半身だけ出し、水平線を眺めている。

時折、肩を落としたかと思うと、片手には5-6センチの透明なエビが捕まれ、素早く水面に浮いている魚入りに放り込まれる。

2人は沈黙のまま、なまぬるい透透の砂地に指先を走らせ、エビのヒゲが揺れるや顔みあげる。

2人は、数10メートルに離れた網の内側にいる小エビを、立っでいられた手綱時を利用して採集しているのだ。午前中で5、6キロ取れるという。エビに選じつて目も時々取れる。

夫婦の生業はエビのつかみ取り以外に砂地に指した藤製の竹籠に目を留らせる養殖など、いずれも川と海の影響を利用している。これらの取獲物は地元市場に出すが、残りは自分達の食べ物となることである。

## 私達はどこに行くのか?

結局のところ、私が君達と一緒に訪れたこの南の地域で考えたのは、そして今、こうして日本に戻って考えているのは「南」のどこ以上に、この紛れもない「北」の私達の社会のことだ。  
私達はどこに行くのか?  
この私達とは君達と僕のことだ。「国際」という学部に来て、否応なしに耳に入る世界の動き。そして、次々と起こる組織暴力の嵐たるものである戦争。アフガニスタンでも、イラクでも、ベネズエラでも、アフタド起る組織暴力の嵐たるものである戦争。アフガニスタンでも、イラクでも、ベネズエラでも、よりよい生活により便利になつた。しかし、他方では、9.11事件の米国のように、より不安にもなる生活は静かに、より便利になつた。テロに對する戦いとは、どこでもいつても誰が何をしてくるかかわらないという脅威の恐怖の世界なのだ。

戦争、そして生活の便利さと不安・不信の共存。それを人類の進歩と呼べるだろうか(2)。

ケータイを構ったかと  
しかし、自分の中からこんな声も聞こえる。「人類の進歩？なぜそんな大きな、余計なことを考えるのだ。もっともっと身近なことを考えよう。毎日は細胞（デブアイメール）で出来ているのだ。」アラソンスの17世紀の思想家パスカルは言った。子供を失ったばかりの王様も狩りに行くと、どこからか禁止される獲物が出てくるから頭がいっぱいになるといったことを。気晴らし（divertissement）とは、大切なことを考えることから逃れる（divert）ことだと彼は言った。

つい最近、ある新聞のコラムで「3分前まで一緒にいた友達に送る携帯メールに何か具体的なメッセージが込められているわけではない。ただひたすら、いつも誰かどっとながつながっていたい。そんな不安が飛び交うメールの背後にはある」（日本経済新聞、2003年11月24日「春秋」）という行を目にした。これも現代の気晴らしかも、と思った。このコラムの執筆者が、大学の専攻研究の比較行動学を研究する方の本を紹介しつつ、書いている。その本のタイトルは「ケータイを構ったカル」（3）である。

本当にその先はからんどうなのか  
もう一度くり返してみよう。私達はどこに行くのか。ある日本人の作家が現代について言えて妙な表現でこう言った（4）。「ただ明るいだけの真夜中のコンピニ」。彼はつけ加えている。「その先はがらんどう考えていくと、冒頭に挙げたクロココン村の海で出会った2人が、何ともリアルに、希望を持って自分に通ってくる。なぜだろう。」

2004年1月30日  
劇俣 謙

- (1) この節は、私の次のエッセーに負っている。「食糧主権のグローバル政治経済学—私達はどんな食世界に生きたいのか」、季刊『職』、2004年冬号
- (2) 進藤龍の語らぎを平和学から私が論じたものとして、近刊予定「二一世紀の平和学のアジエンダ」所収、平和を「質素な非戦文明から探る」を参照、法律文化社
- (3) 正倉信男、副題は「人間らしさ」の崩壊、中公新書、2003年
- (4) 宮内麟典氏の発言。大澤真幸との対談—希望の本脈—「9.11」以後を生きること、神奈川大学評論、第45号、2003年



## 00 巻頭言

「北」から「南」へー暴力空間の ANATOMY(解剖学) 勝俣誠

2004年12月15日私たちは冬の成田空港からまずパリに向かった。泊まった空港ホテルのスタッフはアフリカ系であった。次の日このパリの空港ホテルから市内への切符を買うとき2度目のアフリカ系女性切符売りの彼女に出会った。団体なら安くならど割引往復切符の買い方を細かくおしえてくれた。「南」との最初の本格的出会いだ。パリ市内は東京よりももっと寒々しかった。

そして、その日の午後戻ったパリ郊外の空港からダガー行きの便に乗った。機内にポクたちが入るやどこから叫び声が聞こえた。注意して機内を見回すと、機内の一番後ろの座席で二人の警官に抱えられ、叫ぶ背広姿のアフリカ人に気づいた。やがて、彼がフランス語でなにやら叫び続けている。よく耳を傾けるとフランス語で「わたくしの弁護士を呼んでくれ (Appelez-moi mon avocat)」と全身の力を込めて叫んでいるのがわかった。

同じ機内で居合わせたクリスマス休暇をアフリカで過ごそうとする欧州の観光客の一人がこの叫びにたまりかね、二人の警官に同伴する責任者らしき警官に「こんな状況で、飛行機は出せるのか」と詰め寄ったところ、その警官が、興奮した目つきと口調で反論した。その内容は聞き取れなかったが、乗客は黙って席に戻っていった。

アフリカ人の青年の叫びは離陸するまで飛行機の轟音の中でもはつきりと聞き取れた。彼の叫びは、私には、「この創える国から、オレは抜け出したいのだから。またこの貧乏な国に今更戻るのは絶対イヤだー」という強烈なメッセージとして聞こえた。

私たちはこの機内で、すでに「北」から「南」での移動で学びの入り口を暴力的に体験したわけだ。

XX

グローバル化とは、地球規模で、モノ、カネ、ヒト、情報などがものすごい規模と速度で動くことだとよく説明される。しかし、これらがむたすら真空状態で自由気ままに移動しているわけでもない。豊かな地域、市場のあるところ、資源のあるところをめぐりて移動することがほとんどで、決してその逆ではない。こんなことを考え出したのはこの校外実習の時が初めてでない。日本から欧州を経由して、西アフリカに行く度に、アフリカから富裕国の集まる欧州がけての、人々があらゆる手段を使っている入城圧力をひしひしと感ずる。

例えば、アフリカから欧州の空港に着いたときの緊張ムード。私たち「北」からの訪問者にはさほど厳しくないが、入国者が、アフリカのような「南」の地域からの人々とかわると、入国は極めて厳重になる。数年前から、アフリカからの便は、パリの空港に着陸し

た飛行機から到着ロビーに入る廊下で、先ずは空港警察によるチェックがあり、その後が通常の入国審査と二重チェックが通例となっている。その機内から出た地点で疑わしいと判断された乗客は、そのまま別所へ連行される。「北」の空港とはなんとその南北間の関係ないし不平等がかくも可視的になる暴力的空間であることかと通る旅に宇度にその引力差をひしひしと感じる。

もっとも、貧しい「南」から豊かな「北」へのこの脱出への試みは、空港だけの出来事でない。つい最近、アフリカ大陸と欧州大陸の接点となるジブラルタル海峡に面する、脱出ルートの間は銀座通りとなっている都市で、サハラ砂漠越えに成功したアフリカの若者達が、スペイン領の二重の網に上り、越えようとして、治安部隊と衝突し多くの死傷者を出した。なぜ、そこまでして行くのか。

この夏、私が出張したセネガルでは、大洪水があった。もともと下水道が未発達で、貧困地区でコレラが大量発生した。規制緩和で、ケータイ電話は未曽有に普及し、送金も今や迅速、確実になっている中で、グローバル化の中の貧困である。いや貧困が近代化下だけの現象かも知れない。

そして「北」に戻るたびに思う。同時代を生きる人間として、この暴力的格差を自分自身の中で、どう消化できるのかと。

誰もが自分の安全と幸せを願う。ここまでは自分事で実行しやすい。しかし、そもそも南北問題とはそれに加えて、他の地域の人々も同じように生きる権利があるという気づきの前提がないと成立できない。

自分で精いっぱい思いを越えて、グラス・アルファとしての他者の尊厳の認知という想像力が少しでも君たちの心や頭の中で育てば、この校外実習という「北」と「南」の間のある意味で暴力的移動も希望の旅として位置づけることができると思う。

東京・横浜 2005年秋

